保	育	の	父	・	佐	竹	音	次	郎	に	学	ぶ	会	★	通	信
	音	次	郎	会	◆	I	N	F	O	◆	v	o	l	.	2	1

ホームページ：https://otojiro.link
e メール：info@otojiro.link
取引銀行　幡多信用金庫 下田支店 普通預金 88502
（名義）保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会 会長 中平菊美
ゆうちょ銀行 振替口座 01650-8-43162
（当座：一六九店 43162）
（名義）保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会

コロナ禍３年目の年末に第８波襲来ですが、音次郎会では引き続き内務強化を図っております。史料整理作業がどんどん進んでおります。

保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会（通称：音次郎会）から会員の皆さまに会報（メールマガジン）をお届けします。

◆◇ INDEX ◆◇

【1】日誌（複製版）の贈呈拡大
【2】音次郎史料調査カードの電子化が完了する
【3】高知新聞への掲載が相次ぐ
【4】夢の碑案内看板が完成する
【5】竹島小学校の総合学習で訪問する

――――――――――――――――◆◇◆◇

【1】日誌（複製版）の贈呈拡大

2022.6．4(土）、音次郎資料室に保育の父・佐竹音次郎が34年間にわたって綴った毛筆日誌（一部ペン字）の複製版を、希望者が閲覧できるように展示しました。この日、取り組み日数15日、延べ60人役で日誌複製版の製本作業が完了したからです。詳しい製本作業の様子は前号かホームページをご覧下さい。

複製版が完成してから音次郎会では、史料提供者である音次郎縁者や音次郎と関わりがあった児童養護施設などにも贈呈をしました。そして、最大の目的は多くの歴史研究家の手に届き、目に触れ、まだ知られていない音次郎の事や当時の事実を発掘する事にあります。

その道筋を付けるために、先ず 7.15(金）高知城歴史博物館を訪問し史料整理作業の謝意を表し、今後、城博にも日誌複製版を収蔵して頂く依頼を行いました。また 9.15(木）四万十市教育長を訪問し完成の報告と贈呈について会談しました。

10.21(金）四万十市長応接室にて日誌複製版贈呈式が執り行われ、市長、教育長、生涯学習課長、担当職員２名同席の中、中平菊美会長から中平正宏市長へ日誌複製版が手渡されました。11月になって、市役所２階の市立図書館では郷土史のコーナーに館内閲覧の状態で日誌複製版が展示され、収蔵書籍の検索用パソコンにも登録が完了している状態になっております。

ただ今、高知県知事への贈呈と県立図書館や文学館などより多くの歴史研究家が閲覧できるように各施設へも拡大して贈呈をする画策中です。内々では「やがては国会図書館にも収

蔵できればいいね」と、大きな夢を描いております。

――――――――――――――――◆◇◆◇

【2】音次郎史料調査カードの電子化が完了する

城博さんとの足かけ４年の調査カード作成が４月に完了し、順次、NPO 法人四万十市シニアネットワークさんのご協力により電子化を進めておりました。ところが代表者の訃報を受け一時中断しておりましたが、松山の就労継続支援Ｂ型施設「なかまの会」が引き継いでくださり、９月に合計549枚すべての調査カードが電子化されました。現在、事務局にてデータの統合・整理作業を進めております。

また、それと平行して史料本体の電子化にも取り組み、８月に完了しました。この作業には日誌複製版製本作業でもご尽力頂いた地元ボランティアの皆様のご協力により完遂することができました。

「【1】日誌（複製版）の贈呈拡大」記事で、四万十市へ日誌複製版の寄贈をお伝えしましたが、その贈呈式の時に市長から次のようなお言葉がありました。「一般的に歴史資料の整理は専門家や博物館、図書館等で行われることが多い中、市民活動の一環として資料整理が進められたことは珍しい活動と言える」。　音次郎会の活動が全国的にも郷土史発掘と伝承の１つのモデルケースとなればと願います。

史料本体のデータにつきましても、目下、事務局にてデータの統合・整理作業を進めております。今後、可能なものから広く研究用に公開していきたいと準備しております。

［史料電子化の流れ］

2019年
4．8(月) 高知城歴史博物館館長と企画員来訪し今後の打ち合わせする

2020年
2．8(土) 城博学芸員と史料整理着手、13人出席
8.24(月) 城博と史料整理②、7人出席
9.22(火) 城博と史料整理③、7人出席
9.22(火) 城博により日誌の電子化着手
11．5(木) dōTERRA JAPAN ボランティアによる史料整理作業（第１回）48人出席
11.10(火) dōTERRA JAPAN ボランティアによる史料整理作業（第２回）63人出席
11.26(木) dōTERRA JAPAN ボランティアによる史料整理作業（第３回）53人出席
12.18(金) 城博との史料整理作業を計画するがコロナで中止

2021年
3.11(木) 城博による日誌電子化完成、合計9,355枚の画像データを受け取る
3.11(木) 城博と史料整理④、12人出席
3.12(金) 調査カード第１弾を四万十シニアネットワーク川山代表が電子化奉仕完了
5.24(月) 調査カード第２弾を四万十シニアネットワーク川山代表が電子化奉仕完了
10.12(火) 城博と史料整理⑤、7人出席

2022年
1.13(木) 城博と史料整理⑥、8人出席
2.24(木) 城博と史料整理⑦、9人出席
4.19(火) 城博と史料整理⑧、12人出席

6.21(火) 調査カード電子化をなかま共同作業所（松山市）へ委託のため発送する
7.21(木) 手紙・木箱書類の電子化をボランティア3人と事務局で開始する、以下連日実施
8．2(火) 史料電子化が5日間のべ12人を費やして完成する
9.17(土) 調査カード電子化が完了、なかま共同作業所からデータが到着する

――――――――――――――――◆◇◆◇

【3】高知新聞への掲載が相次ぐ

2021年度は音次郎会でのマスコミ・メディア露出はまったくありませんでしたが、史料整理作業などが完了してきたことから今年度はすでに３回、高知新聞に掲載されました。

① 8.28(日) ちいきのおと 85竹島「郷土が生んだ福祉の先駆者」

この記事は竹島の先人としての保育の父・佐竹音次郎の基本的な活動についてある程度の紙面を用いて詳しく紹介され、「【2】音次郎史料調査カードの電子化が完了する」の記事でも紹介した地元ボランティアの方々と郷土史編纂に取り組んだ成果物としての「音次郎史料」が、今後、研究に有益となることを期待している希望が著されています。

② 9.23(金) 時空 「夢の碑」

この記事は高知新聞社の記者が交代で執筆しているコラムです。故西内育二朗副会長が郷里に帰ってきて自分史作りを開始された時に、旧竹島神社で夢の碑に出逢われた時の衝撃から「竹島の偉人」(児童福祉に生涯を捧げた佐竹音次郎「夢」碑の由来）を自費出版に至った出来事を彷彿させます。育二朗氏の著書は後に音次郎会発足のきっかけにもなったと言えます。このコラムからも新しい展開を期待します。

③ 10.22(土) とさトピ「佐竹音次郎の日誌複製本を寄贈」

こちらは前日に市長・教育長訪問をして日誌複製版を贈呈した内容がコンパクトに的を射て伝えてくれています。小さい記事の中にも贈呈された冊子も含む写真が掲載されました。

この会報にも３つの記事の写しを付録としておりますが、①の記事は大きいため文字が小さくなっております。音次郎会ホームページではすべての記事を拡大して見ることができるようになっております。

――――――――――――――――◆◇◆◇

【4】夢の碑案内看板が完成する

保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会の事業内容には史跡の整備もあります。2017年には全県を挙げて文化的観光イベント「志国高知 幕末維新博」開催に併せて、四万十市観光商工課のご尽力により県道沿いに音次郎史跡への案内標識を設置して頂きました。

2021年度からは大口寄付金を基金として音次郎会として史跡への案内看板設置をする取り組みをはじめました。４月には年度を越えて、辞世の句碑案内看板が完成しました。

11．5(土)、夢の碑への案内看板についても設置完了しました。辞世の句碑案内看板の時と同様、定例会で参加者全員での看板文面の検討、竹島地区長さんはじめ役員の皆様のご理解とご協力、看板屋さんの現場立会から完工までのご尽力により完成しました。写真はホームページで見ることができます。

「～夢の碑～　1876年(M9)紺屋町から竹島に戻ってきた12歳の音次郎は将来に悩み、ここで三日三晩丑の刻詣りをしました。最後の夜、夢を見ました。小児保育院開設後の1900年(M33)にも療養のために竹島に戻っています。この時に音次郎は「夢」一文字に自分の思いを込めてこの碑を建てたようです。まだ詳細がわからない謎の多い石碑です。」

―――――――――――――――――◆◇◆◇

【5】竹島小学校の総合学習で訪問する

音次郎も通った竹島小学校では2002(H14)年ころから地域の先人・佐竹音次郎についての学習に取り組んでいます。音次郎会が2015(H27)年に発足してからは音次郎会から総合学習に訪問するようになり、今回で４回目です。今年も前年に引き続き、11．4(金)に座学１時間、11．8(火)に野外学習２時間を割いて頂き、音次郎の生き様を学びました。

今年の５年生は「佐竹音次郎さん広め隊」と名付けて、まだあまり知られていない保育の父の魅力を発信していく狙いで取り組んでいます。音次郎キャラクター作り、音次郎マップ作り、音次郎ソング作りにも取り組む予定との事で、キャラクターから派生して紙芝居作りにも到達できれば、との大きな目標があるようです。

音次郎会では紙芝居作りにも取り組んでいますが、作画の分野で座礁している状況にありますので実現できれば新しい視覚教材となるので大いに期待しています。

生涯学習として竹島小学校ばかりではなく、その他の学校、地域の学習会やイベント等で音次郎を紹介するプログラムをお届けします。ぜひ催事の企画者さまはご一考くださるようお願い申し上げます。

竹島小学校での訪問授業の様子は音次郎会ホームページにて過去の分も含めて閲覧することができます。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇　現在の会員数　120 名　◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

2022.11.14 Mon

日本で初めて「保育」という言葉を生み出した「佐竹音次郎」に関心のある方、入会希望者のご紹介など、お気軽にご一報ください。事務局から案内をお送りします。現在、鎌倉子孫の御協力により鎌倉一円の会員が増えております。地元で興味関心がある方があれば、ぜひ事務局に御紹介ください。

保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会　会長　中平菊美

各種お問い合わせは　→→→　四万十市下田２２１１（若草園内）
0880-33-0247　瀬戸へどうぞ♪
ホームページ：https://otojiro.link　e メール：info@otojiro.link

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

地域NOTE

ちいきのおと　85

地域の音

竹島（たけしま）

四万十市

郷土が生んだ福祉の先駆者
佐竹音次郎の業績後世に

佐竹音次郎日誌の複製本。右側は音次郎と妻の写真（四万十市下田の若草園）

明治～昭和期、貧困などさまざまな事情で居場所を失った5十人以上の子どもを「わが子」として育てた佐竹音次郎（1864～1940年）。彼が生まれ育った四万十市竹島では、有志らが結成した「保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会」のメンバーが、業績を後世に伝えようと、地道に活動を続けている。（幡多支社・芝野拓輔）

音次郎は地元で教員を務めた後、上京して医師に。30歳で神奈川県の腰越に医院を開業し、2年後に身寄りのない子たちを預かる「小児保育院」を併設した。

孤児院としなかったのは、「自分たち夫妻が親になるのだから孤児ではない」との思いから。実子ともわけ隔てなく面倒を見た。やがて医院をやめ、保育事業に専念。42歳で鎌倉小児保育園（後の鎌倉保育園）を開設し、海外にも施設を開いた。正確には不明だが、76歳で病没するまでに5千人以上を育てたとされている。

□　□

だが、古里の竹島でも、こうした業績はほとんど知られていなかった。顕彰のきっかけは2014年、近くの下田地区にある児童養護施設、若草園を運営する栄光会が開いた音次郎に関する講演会。住民ら約320人が聴講し、「竹島出身のそんな人物がいたのか」と話題になった。

翌15年、有志らが「学ぶ会」を発足。市出身の児童文学作家に音次郎の伝記執筆を依頼した。

佐竹音次郎の業績について話し合う「学ぶ会」メンバーら（四万十市竹島の下田地区竹島防災コミュニティセンター）

授業・案内板・資料収集… 有志ら 顕彰続ける

辞世の句碑と観光案内板（四万十市竹島）

り、「辞世の句碑」など竹島に点在するゆかりの地に案内板設置をしたり。竹島小学校では音次郎に関する出前授業を担い、19年からは高校などの卒業生に伝記を贈り、児童福祉にささげた生涯を伝えている。

「私自身も02年に竹島小へ赴任するまで、音次郎を知らなかった」同会会長で元竹島小学校長の中平菊美さん(71)は率直に思いを語る。「彼は家庭や地域社会から排除され、社会の底辺にいる人々を救った。その生き方を、これから社会に出る子どもたちにこそ知ってもらいたい」

□　□

同会は資料収集と整理にも力を入れる。集まったのは、縁者から寄贈された自筆の日誌（1905～39年分）や手紙、板垣退助や渋沢栄一ら著名な支援者が名を連ねる芳名簿など約600点。日誌は県立高知城歴史博物館の協力を得てデータ化し、複製本も制作した。

若草園職員で同会事務局の瀬戸雅弘さん(56)は「日誌を読み解けば、複雑な時代背景の中で保育事業をどう進めたかが分かる。それを現代の福祉にも生かしたい」と期待を寄せる。

膨大な資料の分析は簡単ではない。会員は約120人に増えたが、十分に時間を割いて活動できるのは数人で、専門知識もない。それでも中平さんは「仮に自分たちができなくても、後世に研究を引き継ぐ人が現れてくれるだろう」と前向きだ。

竹島が生んだ福祉の先駆者。その思いや生涯はこれからも、地域で語り継がれる。

竹島は、四万十市南部に位置する自然豊かな地区。国営農地の果樹畑や水田が広がり、雄大な四万十川も流れる。土地の古老は「都会のように気張らんでも、土地と川の恵みでなんとか食っていける。そんなおおらかさがある」と胸を張る。7月末現在、225世帯410人。

自慢のイッピン

滴るさわやかな甘さ

・竹島ナシ

豊富な水分が特長で、かじればさわやかな甘みが口いっぱいに広がる。四万十市で知る人ぞ知る果実、竹島ナシ。直販所「彩市場」では、土や肥料にこだわった自社農園の〝もぎたて〟を販売する。

中村市史によると、竹島ナシの栽培は大正時代に始まった。米作りを断念した農家が県外から取り寄せた苗木を植樹。当初は周囲から笑われたが、6、7年後に実がなり始めると、われもわれもと栽培する人が増えて産地になった。

農家がナシを満載したリヤカーを引いて中村で売り歩く姿は風物詩にもなったが、高齢化などで衰退。現在は生産農家も少ない。彩市場の池本貴彦さん(64)は「市外の人にも食べてほしい」。1個350～300円（税込み）。彩市場は午前8時～午後6時、水曜定休。

あの日あの時

（1991年）

揺れた国営農地事業

1991年、旧中村市時代に双海地区で開かれた市政懇談会は緊迫した。議題は隣接する竹島地区の国営農地整備。竹島から双海を経て土佐湾に注ぐ放水路の建設に住民が反発。当時の川谷瑛男市長が説得したが、物別れに終わった。

国が主体となって農地造成や区画整理を進める大事業。幡多地域５市町村で計1166㌶の整備が計画された。85年度に着手したものの、地元調整の難航などで、完工したのは2001年度。面積も３分の１の計334㌶にとどまった。

竹島では放水路の建設が見送られ、ようやく約90㌶を整備。ただ、その後は果樹栽培や稲作が盛んになった。農地を管理する土地改良区理事長の永野侃さん(71)は振り返る。「私も水路には反対したが、農地整備自体は必要だった」

ちょっとチャット

沢田 真緒さん(12) 竹島小６年

竹島小の６年生は11人しかいませんが、みんな仲良しです。竹島を流れる四万十川はきれいで大好き。友達やお父さんとエビを取って遊んでいます。竹島出身の佐竹音次郎さんは、みんなのために生きたすごい人。勉強したことを壁新聞に書いて発表したり、「音次郎一生すごろく」を作ったりしています。

◆次回は９月４日に「大川筋２丁目」（高知市）の予定です。

こうちワイド kochi wide

地空 jikuu

幡多支社
芝野　祐輔

夢の碑

どれほど優れた業績を残しても人はいつか朽ち果てる。だから人々は、残したい言葉を朽ちることのない石に刻んできた。記念碑、歌碑、句碑―。種類はさまざまあるが、四万十市竹島の竹島神社にある石碑はどう解釈すればいいのだろう。

「夢」。石碑に刻まれているのはたった1字。いつ、誰が、なぜ建立したかもない。正体を調べると、地元に「佐竹音次郎の碑」と伝わっていた。

音次郎（1864～1940年）は竹島出身。神奈川で医院を開き、身寄りのない子どもたちを世話する小児保育院を併設した。後に医者はやめて保育事業に専念。海外にも拠点をつくり、76歳で病没するまでに5千人以上を育てたとされる。

音次郎は10代のころ、行く末を悩んで竹島神社へ参詣を重ねた。そしてある晩、神の鎮座する場所の扉を開くと何もなかった―という不思議な夢を見た。彼は〈これは神様のお告げ×本当に助けを頼むのは神様ではない。自分の力を養うべきだ〉と決意したという。

子どもたちに生涯をささげて「保育の父」とも呼ばれた音次郎。夢の碑は、その途上にあった30代のころ、兄の資金援助で建立した。彼は「夢」にどんな思いを込めたのか。

「夢の解釈は見る人それぞれで違っていい。私の夢は…と考えるきっかけにもなりますよ」と、音次郎を顕彰する市民団体のメンバー。今は石碑を訪れる人も少ないが、案内板を設置する計画を進めている。

建立から約120年。物言わぬ石碑の前でたたずんで「夢」の字を見る。自分も40代半ば。本当にやりたいことは何だったか、来し方と行く末を思った。

とぴっく

◆佐竹音次郎の日誌複製本を寄贈

「保育の父・佐竹音次郎に学ぶ会」（中平菊美会長）は21日、四万十市竹島出身で5千人以上の子を育てたとされる保育事業家、佐竹音次郎（1864～1940年）が記した日誌の複製本を市に寄贈した＝写真。

明治後期から昭和初期に記した日誌をデータ化し、31冊の複製本として整理。中平正宏市長は「大変意義ある資料」として市立図書館で展示、公開すると述べた。（幡多）